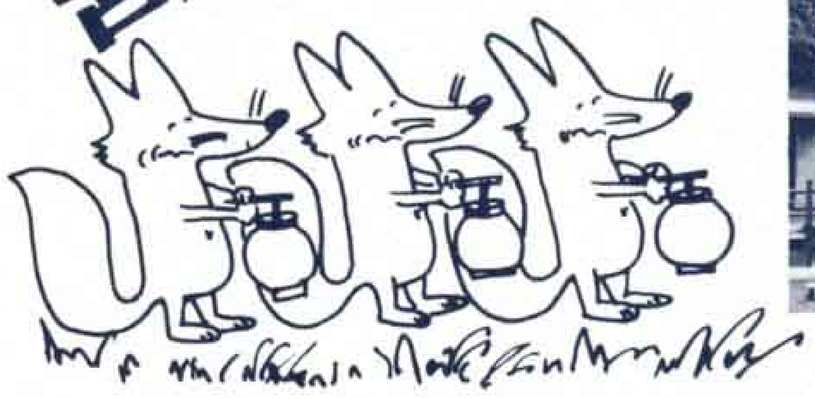
ふるさとの昔話

善光島のきつね



善光島のお宮さん

善光島（今の荒田島２丁目付近）のお宮さんは、昔、狐がでたという言い伝えがありました。

人と動物の交わりはいろいろなエピソードを生み出します。動物とのほのぼのとした結びつきは、ほほ笑ましいものです。今回は、善光島の狐というお話しです。

お礼にちょうちんをかざす

昔の津田村は、家は飛び飛びで、道は狭く、それに木が生い茂っていました。吉原１丁目を寺町といったころ、津田村の百姓がお祭りですしをつくったので、重箱に入れて、寺町の親戚へ持っていこうとしました。

そして、善光島のお宮さんのところへくると、重箱が重くなったり、軽くなったりしました。

善光島のお宮さんは、木が生い茂った森で、昔から狐がでるというううわさでした。「はてな？狐のしわざかな。」と思いましたが、きみが悪いので急いで寺町の家にいきました。

寺町の家について重箱をあけると油揚げのおすしが一つもありません。狐にとられてしまったのでした。

夜になってお宮さんの前を通るとごちそうになったお礼のつもりか、狐たちがちょうちんに火をつけて、お宮さんのまわりを昼間のように明るくしていたそうです。

寂しい場所だったね

高井さん

荒田島町に住む高井進さん(73歳)は、「だれだかが、化かされて田んぼの中を歩かされたという話を聞いたことがあるね。とにかく寂しい所で夜なんか１人で歩けなかったね。」と語ってくれました。

地名の由来

神谷（かみや）

この村は、増川尾根と須津川とに囲まれた扇状地に開けた部落で、平地の中央に神明宮を祭ってあります。

そのため「神のいます谷」という意味で、土地の名を神谷としたものでしょう。

この平地には数十基の古墳があって、中でも千人塚古墳は最大です。

このことは、大古から人々が住んでいたことを示すものでしょう。

古墳のはなし ⑭

古墳と祖先の生活

土師器

須恵器

土師器（はじき）と須恵器（すえき）

土師器（はじき）は古墳時代から奈良・平安時代につくられた赤褐色（せきかっしょく）をした素焼（すや）きの土器です。

粘土（ねんど）をひものように延ばし、積み上げて形をつくります。

縄文（じょうもん）土器や弥生（やよい）土器と同様に直接火の中で焼く「野焼（のや）き」という焼き方でつくられたものです。

煮炊（にた）きに使うかめやこしき、食物を盛るおわん、貯蔵用に使うつぼなどの種類があります。

須恵器（すえき）は5世紀(1,500年前)に大陸から伝えられた素焼きの土器で「陶部（すえべ）」と呼ばれる専門の職人がつくりました。ロクロで形をつくり、「窖窯（あながま）」といわれる窯を使い1,000度以上の高温で焼き、土師器のように水を使わず、一度にたくさんの土器をつくることができました。須恵器は主に食物を盛るつきや貯蔵用のつぼなどに使われました。

こちら編集室

今年１月の県広報コンクールで、「広報ふじ」が入選――。

行政からの一方的なお知らせだけにとどまらず、市民とともに作る広報紙をモットーにスタッフ一同、「来年はぜひ知事賞を」と張り切っています。

発　行：富士市役所　富士市永田61－1　☎51－0123
編　集・総務部広報広聴課
人　口　215,100人　男　106,924人　女　108,176人
世帯数　60,836世帯　（２月１日現在）